

# MASセミナー 第15回

## 「心をつむぐ建築Ⅱ こどもの居場所」

2014.04.26 (土) PM 2:00 ~  
JIA建築家クラブにて

港 港 港 港 港 港 港 港 港 港



建築家 山崎 洋一



日本建築家協会 関東甲信越支部 港地域会

### 目に見えない危険は大人の責任

1946年にエーロサーリネンによって考案されたウームチェア(ウームとは女性の子宮)は、いちばん居心地のよい場所という意味で命名された素敵なおウンジチェアである。ところが現代では母親のおなかの中でさえ安心出来ない状況がある。日本の電磁波を発生する調理器具は流産を誘発するという医師からの警鐘があるからである。また住宅建材や日常の雑貨などに含まれる目に見えない化学物質は特に幼児期の子供達にとって危険である。高機密、高断熱の現代の住まいは実は空気環境においてこれらのことを助長する危ういものがある。すべての意味でむくな子供、彼らの居場所、とくに住まいはトータルな意味での安全を確保することがまずもとめられるのではないか。



今井 均

### こどもの気持を忘れるな

自宅には広くはない庭がありました。そこに隠れ場所を作ったり、木に登って隣近所を眺めたり、太平洋が見えないかなど探ったものです。少し大きくなって、そういうことに慣れたか飽きた頃に、同級生が母親に連れられて挨拶にきました。普段付き合ひのない奴だったので、多分、新入だったのかも知れません。どういきさつか庭に案内したら、いきなり木に登り始め、大興奮で、「僕はこういうところに来たかったんだよ」とわめきました。子供ながらに、奴は木も庭もない家に住んでいるんだと、気の毒に思ったのと、「いい年をして」よく恥ずかしくないなと思ったのが同時に胸を突きました。このような、忘れてしまいそうな子供時代の生活実感は誰でも持っているでしょう。実際、忘れて大人になるのですが、こういう子供時代の心理も読み込んで設計に活かしたいと思います。



大倉 富美雄

### 無駄や失敗から学ぶこと

学校がえりの寄り道、道草や廻り道、それは僕達が子供のころのささやかな楽しみだった。勉強が出来ても出来なくても、メンコやけん玉が上手いとヒーローになれることが子供世界でちゃんと機能していた。そういう私たちが齢を重ねるに従い、廻り道や遊びを無駄なこととして遠ざけるようになった。鎧、兜で心身を防御する知恵を嫌がおうにも身につけてしまった。そんな大人(親)から子供たちは効率の良い人生の道標や安全で失敗のない生き方の処方箋を早い時期から与えられ続けてきたのかもしれない。無駄や失敗から学ぶこと、これはとても大切な。



鈴木 理巳

### 子供が成長する空間

まちの中に子供が自由に遊べるおおらかな場所が失われてしまいました。子供時代の記憶をたどるとき、空き地やがけ、路地裏の階段や昆虫、小さな花など、自分で発見するひそかなものたちが宝物だったと思い出されます。日常の中にそっと隠されている「子供の居場所」は、大人たちの「心をつむぐ場所」かもしれません。今の時代に、子供のための居場所を考えるとわたくしたちにないことができるのでしょうか?みなさんと一緒に考えてみたいと思います。



田口 知子



### 公共空間に子どもの居場所を創る

現代の子どもの周囲を見渡せば、路地がなく、原っぱがなく、家にも遊ぶ余地がない。学校の登下校でも、交通安全とセキュリティはしっかりしているが寄り道できる場所がない。大人の視点で街がつくられ近代化され効率的な街ができたが、子どもの視点での考察はなかった。成長する可能性を秘めた子どもに与える空間を、教育空間の設計を通じて考えてみたい。



宮田 多津夫



### 一見守りの空間ー 子供にとっての建築の役割

人それぞれに、こども時代の原風景が心に刻まれていることと思います。人間形成期にこどもが建築から受ける心理的な影響ははかりしれません。建築家の仕事でも、このことは肝に命じ、一歩間違えば知らないうちに小さい心を傷つけてしまうこともありえることを意識すべきだと思います。今回のMASセミナーでは児童養護施設の建築での経験をお話させていただきます。



村上 晶子

### 建築やまちづくりに子供が関わる 機会をつくる!

子供の能力は計り知れない。以前、大工技術を教えるワークショップを頼まれた時、子供たちで建物を調べて何が必要なかを話し合い、それを大工仕事で作った!アイデア満載だ。おもちゃライブラリーの建築でも子供たちが参加し、面白いものができた。子供の参加は街や建築を豊かにするのである。



連 健夫  
(むらじ たけお)